もうあと二ヶ月で此靜かな秋の湖東の天地に驚天動地の大活劇は演ぜられるのだ。砲聲轟き、硝烟漲り、劍戟は閃く。――人々は眞面目にならざるを得なかつた。
銃監部は東小學校、外國武官宿舍は彦根高等女學校、縣廳は公會堂に臨時移轉することになつた。縣では縣會、町では町會が開かれて臨時費の支出が議決される。二寸四方位の杭に井桁の版をおしたレッテルが家々の戸口にベタ〳〵貼り付けられる。各宮殿下を始め陪觀諸將星、國會議員の宿舍割當が始る。割當てられた家々では有難い幸せとお受に及んで、早速邸宅の新築修繕、疊建具の取換え、前栽庭園の手入れに無中になる。職人や日傭がせまい市中を右往左往する。その忙しい目貫の道路には鶴嘴が光る。砂利の山が續く。演習氣分は次第に充ち滿ちた。
本に返つて大本營はと見るに、もう七月の頃から姿を見せて居た縣の吏員が絶え間もなく出入する宮内官も續々と下つて來る。厨所、憲兵の浴場、運動場に築かれる大厩舍等の繩張りはとつくにすんだ。廣い運動場はどちらを向いても材木の山。十月の月始めからは愈々數百の職人連が上方から入込んだ。大きな繪圖面を持つた技師がウロ〳〵する。各方面の工事は一せいに始つた。生徒控場の裏側には荒削りの急拵への、而も頗る器用に出來た湯殿が二つも四つも出來上る。と見る間に運動場に於ては西端より南端に及ぶ、實に六十四を容れ得る大厩舍が、これは又更に荒けづりの、といふよりただの丸太を組合した頑丈な奴が出來上る。この尨大な大建築は殊に目に殘つて居る。それから寄宿舍の塀に沿ふて、あはれ美しかりしテニスコートを穴だらけにして、此處にも一つの建物が出來る。大体骨組が終るといふと、積上げてあつた折詰に使ふ樣な薄板が早速役に立つて屋根に葺かれる。氣持の好い小春の日光が心に溶げ入つたと見えて、あの急峻な足がかりのない屋根から、立板に流るゝ團子の如くコロ〳〵と墜落してウンと計りに氣絶するといふ、大演習の前狂言を勤めて呉れる屋根屋さんもあつたが、兎に角魏然

たる大建築が運動場に靜まり返ると、忽ち鎚の音かんなの響は博物教室の邊りより漂ひ來つて、唯見る玄關より會議室を貫いて特別教室に至る廊下は既になり、固より内を窺ふを得ないが御座所となるべき博物室内外の工事も餘程はかどつたらしい。諸工事の進捗目覺しいが内に時は流れ日は過ぎて十月の終りとなつた。吾等の心は躍らずには居られない。
寄宿舍の長曾根波止場の「まつ屋」旅館に移轉と同時に校舍も當局に明渡して十一月に入つた。停車場の模樣替も竣工した。驛前には滋賀縣よりの京橋前には彦根町よりの緑門が建てられ、雪を頂いた西江州の山々を背景にしては天を衝く大饗宴場の櫓が突立つて居る。上り下りの列車は彦根下車の人間と貨物とを以て塡り、大本營、統監部、賓客宿舍行の荷車は絡繹織るが如く風來坊を面喰はする事甚しい。こうした内に六日の日は來た。
　兩陛下御同列にて御陵御參拜の爲京都に向はせられるのである。
これより前、學校に於ては例の奉迎歌の練習があつた。隨分調子や步調が合はなかつたりして難しかつた。
次に歌調を掲げる。

奉送唱歌

一、伊吹の嶺に秋高く
　琵琶の湖氣も澄みて
　皇御軍野に山に
　滿ちわたりたる勇しさ。

二、ならす御軍御みづから
　鑾はさんとす皇大君
　近江の野邊に露分けて
　行幸すこそ畏けれ。

三、生ける甲斐あり民草の
　昔もあひし御光を
　また打重ね仰ぎ見る
　光榮ある今日の嬉しさよ。

四、いざ諸共によろこびの
　聲の限りを歌はなん
　いざ諸共に大君の
　千代の御榮壽かん。

それから當時警官連の馬乘り稽古の一段があつた近郷近在の馬車馬や百姓馬を寄せ集めて、本校の校庭で盛なる練習。指導のため差遣された某聯隊の輜重中尉の合圖がかゝると、首を始終たれてばかり居るのやら、猫の樣な小馬やらが、怪しい腰付の騎手をのせて一齊にピョコ／＼と驅出して圓運動を始める。鞍上鞍下の二動物共に天下の一大奇觀たるを失はなかつた。練習中ふり落されたものも二三はあつた。これも大演習の餘興の一つ。然しこれでも愈々の時には騎馬巡査として相當に役立つた、練習の効は恐ろしいもの。

十一月五六日頃から、方々に途中着陸して道草を喰つた飛行機がボッ／＼と南北兩根據地に集つた北軍根據地は長濱の北一里。伊吹颪しの激しい所。毎日練習飛行があるといふので相當見物に行く人があるらしい。時々彥根の方まで飛んで來る。此飛行機が何といふても演習中一番の人氣者であつた。

星の記標のついた陸軍々用自働車も此の頃になると砂烟を揚げて疾驅して居た。御料の馬匹も毎日空馬車を引いて調練せられて居た。

十三日は朝から飛行機が飛び交うて居た。道行く人は皆口を開いて空を見て居る。「比較的飛行機に珍しき方なれば……」と新聞に書いてあつた。

此度の提灯行列は實際未曾有の人出であつた。濠端を一巡り巡ると雨がショボ／＼降つて來た。

十四日、降つたり止んだりして居る。飛行機やら機關銃やら軍樂隊やら何やらかやら、ただもうザワ／＼して居ても立つても居られない。「夜半北軍工兵一箇小隊は扁舟に乘じて竊に瀨田橋畔に上陸し爆彈を云々」など云ふ新聞社前の赤い圈點付きの掲示を見てはいやが上にも心が逸る。

軍樂隊といへば例のそゝるやうな緋の洋袴を付けて聖上御統監の御留守中はいつも長光寺等の空地で練習して居た。それから御駐泊中は毎夜八時の

鐘が鳴るまで大本營の前庭には嚠喨たる樂の音が起つて居た。そうして大本營の東の堀端、幾間おきにか憲兵の佇立して居るあたり、三々五々黑い塊が美しい樂の音に聞惚れて居た。

十五日、戰場が非常に近附いたので一層ザワ／＼する。郵便局では赤布を左腕につけた新聞記者が電話口で原稿を讀上げて居る。「戰機熟するにつれ兩軍飛行機の來往愈々繁く、今朝愛知川原に於て――えゝ愛、知る、川です――」などゝやつて居る。芹川堤に出て見ると河瀨の空あたり、薄黑い繫留氣球がションボリと雨に濡れて居る。女學校裏の桑畠には疲勞しきつた約一個大隊の北軍の兵士が、背嚢枕にグー／＼寢ね居る。豬ら顏の大隊長が民家の軒に床几を据えて頻りに地圖を按じて居る。參謀肩章をつけた統監部附の將校が馬を飛ばして巡禮街道を驅違ふ。

此の夕、兩軍飛行機四五臺、非常な低空にて雨中遭遇戰をやつた。時々吃驚する樣な大音を發して爆彈が破裂する。

夜は夜通し町中がザワ付いて居た。明朝の拂曉戰を見物の連中だ。

明くれば十六日、非常に寒い朝だ。東が白む頃から兩軍の大砲がうなり出した。非常に霧が多い。現れたり消えたりする兵士を見て居ると何だかパノラマでも見物して居る樣だ。八時頃兩軍の飛行機が全部出揃つて低空を旋回して居たが、地上の活劇が餘りに激しいために例の爆音なんか少しも聞えなかつた。まるで無言劇だ。

肉薄戰!! 壯絕快絕といひたくなる。然し何分舞臺が泥濘膝を沒するといふ水田で、それに見物人が非常に雲集して居るので兵士の活動が餘り敏捷でなかつた。門外漢の記者の見るところでは一体こんな最終の肉薄戰なんかほんの餘興の樣に思はれる。なる程前哨戰から始るのだからつまりは此劍戟相摩の大活劇となるべきではあるが、演習の眞の意義はむしろ前後に於ける退却戰、追擊戰にあるのではなからうか。この接戰の如きは予の見るところを以て言へば殆ど兒戲に等しい。

見物人は見物人で、大根畠を蹈みにじつては前進する兵の後にクッ付いて行く。これでは邪魔にな

る筈だ。現に予は澤山の彌次馬が大根畠から一匹鼬を追ひ出してさんざ包圍、追撃、肉薄した揚句とう〱踏み殺して了つたのを見た。とんだ餘興だ。

十七日、閲兵式の日。昨朝よりは大分空模様が怪しい。星影が一つも見えぬ。とう〱聖上御出門間際に中止となつた。こんな殘念なことはなかつた。

午後は大饗宴が行はれた。朝とはうつて變つた好天氣。三時聖上宴會場御還幸の後間もなく、微醺を帶びた數千の將校が菊花を胸にさして會場から吐出される有樣は中々目覺しいものであつた。國家の干城こゝに集るといひたくなつた。この雜沓の中に伏見、閑院兩殿下を無蓋の御馬車の上に拜した。

聖上御還京後數日間は行在所、大饗宴場拜觀が許されたので、衆庶臣民遠近より集り來る者堵をなして順次靜肅に拜觀して居た。

これが濟んで居殘つた電信隊も引上げて了ふと、彥根はやつぱり寂しいもとの町に返つた。たゞ怪しげな繪葉書屋が箆棒な投賣りを試みて閑人の足をとゞめて居るばかり。

繪葉書といへば、本校では二回繪葉書發行があつた。一回は生徒考案の圖案を基とした紀念繪葉書で二枚、他は大本營内外の寫眞を以て製したもの四枚。

以上思ひ出した事をとりとめもなく書いて見た。

尚詳しくは當時の新聞紙を見られたい。

特別大演習參加の記

北川貞次郎

我れ身を軍職に奉じてより七年、此間大演習參加の榮を得し事二回、而も二回共實に思ひ出深きものであつた。一回は大正三年卽ち青島戰のあつた年河内平野で行はれたもので戰地に於ける同期生の花々しい活動振を聞いて身の不遇を託ちつゝ慰安の意味で參加した大演習である。伊賀上野で有名な荒木又右衞門が河合又五郎一派を討つたと云ふ舊跡にさしかゝるとき、恰も青島陷落の號外が來て、一同萬歲を大唱した事は尙記憶に存して居る。

第二回目は卽ち今回のものである。戰場は故鄕の地。大本營は母校。大阪師團に屬する余が、行く土地、出る地名、皆思ひ出の種となる今回の大演習に參加の榮を得たのは何たる幸福であらう。

大演習が終つて、久し振に金鵄城に上つたときの感!、大洞……ボートレース、切通し……兎狩、芹川堤……發火演習、畏くも君います大本營は……姿こそ變れ忘れ難き我が母校。……思はそれからそれへと馳せて止め度なく、感無量、到底此處に記す事が出來ない。

* * * * * * * *

「中尉殿大隊長が御呼びになつて居られます」と大隊當番が云ふて來たのは、十一月十三日午後五時愈々明日からと云ふ前日の事で、場所は夏見といふ伊賀の名張町の東十町許の一寒村であつた。

早速本部に駈けつけて見ると大隊長殿は笑顏を以て迎へられ、南軍特別方略を見せられた後「本日午後六時から對敵動作にうつるから、夏見東端に外衞兵を立てる樣に」と命ぜられた。ある〱！長濱、木之本、醒ヶ井。愈々事が面白くなつて來たぞ。

外衞兵をたて終つて歸つて見ると、午後六時以後何時でも出來る樣に準備せよとの事で兵卒は明日の晝食まで煮て騷いで居る、中には「中尉殿、命の間に少しでもと思つて橫になりましたが嬉しひので寢られません」と蒲團の中で眼をパチクリさせて居るのもある、事々物々何となく活氣づき愉快そうに見える。「之れが實戰で、土地も敵地であればなー」とは一兵卒のもらした嘆聲である。

併し出發は案外遲く午前四時名張町の北端を出發した、行進目標は佐久良川の線である、行程十七里、しかも急行軍と聞て內心ビクッとしたものもあつたろうが流石に「武士の子は腹がへつてもひもじうない」式に敎育されて居るので一名も弱音を吐くものはない。夜が明けて上野の市街に入つたときプロペラの音高く敵の飛行機が、上空に現

はれた町民は珍らしそうに空を眺めて居た。これ敵に對する初見參である。

午前十一時四十二分は我が意義ある第一歩を甲賀郡の一隅に刻した時である。其後深川を經て貴生川驛に到れば、そこには既に我が錦城師團の某隊から出た停車場衞兵が嚴重に警戒して居る。彼等は奈良から鐵道をもつて輸送さるゝ友軍の來着を待つて居るのである。

「ヨウ」。「ヤア」。「御苦勞」。「しつかり頼むぞ」。之れはそこで初めて逢ふた兩隊の兵の間に交はされた言葉である、言や頗る簡なりと雖も此の飾らぬ言葉の中には、無限の意味が含まれて居る、吾人の心肝に共鳴するのは巧言維持とする奴輩の數萬言に非ずして無骨な武人の口から出た此の一語である、此時我隊の兵は口にこそ出さね「安んぜよ戰友諸君、我等は大江山下で鍛ねた荒武者で御座る。」と深く感謝したに相違ない。暫くすると次の樣な命令が來た。

師團前面の敵は歩兵約一旅團を基幹とす、前衞は高尾山附近を占領して此敵と對峙す。旅團は今より岡本東側地區に開進せんとす。云々

砲聲がする、銃聲も聞える、彼此の飛行機相亂れて推進機の音は人の氣をそゝりたてる、今迄足元の怪しかつた兵も忘れた樣に元氣を出した。之れならば大丈夫、これでこそ我隊の兵。

岡本に開進を終るや直ちに師團は今より攻勢に轉ずると云ふので聯隊は軍旗を先頭に堂々と進んだ併し殘念な事には、振り上げた拳のまだ下さない内に、日は西山に沒し、戰闘は中止された。

まもなく演習は再興されたが我は遂に敵を見る事なくその儘朝日野村の鈴村に露營することゝなつた。銃聲は此處彼處に絶えない。其間を五年間御世話になつた親愛なる近鐵君が、時々威勢よく通る。月こそなけれ空はさへて兵隊の御馴染の大熊星も明瞭である、あゝあの星の方こそ……。

霜滿軍營秋氣淸……と思はず口吟んだ。遠くけたゝましく犬の吠へるのが聞える斥候を怪しいものと間違へたのであらう。

突如命あり、我は明朝から戰闘員外となつて特別任務に服する事となつた。折角樂しんで待ちに待つた此演習に……。されど命なればいともかしこし、難苦を共にした諸上官や同輩や、手足と働いてくれた可愛い下士卒に別れを告げて獨り淋しく任務についた。その後は遙かに一同の武運を祈るより外にせんすべもなく。遂に振りあげた拳を下す時機は來なかつた。

* * * * * * * * *

演習は終つた、然り期待した特別大演習は夢の如くに終つた、併しながら彥根人士否我縣民のなすべき事も終つたであらうか？否々。

歐洲戰は如何、支那は如何。露西亞は如何。我國青年の現狀は如何。而して我縣民の活動振は如何。縣民覺醒の期は來たのではなからうか？、大は我縣下の青年の奮起を望むのではなからうか轟く砲聲は縣民を促す爲のものではなかつたらうか。近江商人の出生地であり、甞ては直弼公を出し、近江聖人を出した民は、空に聞ゆるプロペラの響を春浪の小說でも讀む氣で聞いて居つてはなるまい思ふ事多くして筆之に伴はないから之れで筆を擱く。擱くに望んで名譽ある在學生諸君に切望する諸君の責任や實に大である。幸に自重せられて、邦家の爲奮起せられん事を。

（六、十二、於週番士官）

部　報

武術部報

送別武術例會

二月三日、朝來細雨霏々と降り頻りて軒の殘雪をうち滿目蕭條、春立たんとして而も餘寒頗る凜烈朔風吹荒ぶといふに非ずしてシン〳〵と身の髓まで泌み渡る樣なる底冷えの日なり。此日送別武術例會開催せらる。內外遠近より集れる勇士幾十百大刀を横へて乘込み來るはそも何れの敵ぞ、曰く岐阜、曰く八商、曰く長農、曰く彥警、彥揚。誠に近來稀に見るの盛會なりき。

左に當日の記錄を止む。審判は劍道淺田、坂、手塚、松本。柔道は大坪、本多の諸先生。

午前之部

外來諸君の非常に多數なりし爲、午前中にて本校生の劍柔道三本試合を終れり。

劍道三本勝負

（小山○○　藤澤○）
（森　大菅○○）
（藤野○○　小堀）
（中島○　垣見○）
（幸島○　漢見○○）
（北川○　澤村○○）
（中村○○　齋藤○）
（橋本○○　中澤○）

（小關○○　倉垣○）
（倉田○　山本郷○○）
（河路○○　高橋○）
（富永○　辻正○○）
（横關○　小澤○○）
（山澤　東野○○）
（加納○○　波木居○）
（富永○○　小河原）

（木之下○○　大橋）
（藤野鷹○○　堀田）
（山中○　松井○○）
（辻正　寺澤○○）
（大矢○　岩根○○）
（中村○○　岡野○）
（秋口○○　吉田）
（東野○　松本）

（直塚○　齋藤○○）
（藤谷○○　辻○）
（小原○○　西村正○）
（三橋　大庭○○）
（松井○○　橋本孫）
（波木居　仙波○○）
（大鳥居○○　野口）
（松井○　村田○○）
（新田○　秋山○×）
（森居○　廣田○×）
（河原○　藤井○×）
（谷口　垣見○○）

（木村柳○○　野田）
（佐々木　森○○）
（七里○○　中澤○）
（小西○　門根○○）
（藤井○○　野口）
（井關○○　垣見○）
（藤谷○○　佐々木）
（廣田　加藤○○）
（眞塚○　池田○×）
（椋田○　森○×）
（安田○　谷口○×）
（橋本　吉原○○）

（德田○　松木○×）
（七里○○　黒田）
（池田　能瀬○○）
（村田○○　大鳥居）
（小河原○○　大橋）
（西川○○　垣見○）
（河村　西川○○）
（小西○○　小原○）
（加藤○　門根○×）
（河村○　井關○×）
（成宮○　森居○○）

柔道三本勝負

（三橋　山本○○）
（山崎　齋藤○○）
（德田　大塚○）
（仙波○　松木）
（中村　阿原○○）
（秋口○○　關）
（秋山○　椋田○×）
（伏木○○　椋田）
（大野○○　大久保）
（橋本　吉原○○）
（大久保正　西川○○）

（池田○○　野瀬）
（樋口　雨森○○）
（成宮　猪田×）
（松木○○　波木居）
（山崎　東野○）
（山崎　草野×）
（松居彌○○　大野○）
（谷　橋本恭○）
（大久保正　中村市○○）
（瀧谷○○　辻○）
（中居○○　中村）

（吉田○○　藤井○）
（中島○○　吉村）
（小澤○○　岡野見○）
（山本○　小原）
（廣田○　七里○○）
（園　關×）
（成宮○　阿原○○）
（秋山○○　笠原）
（伏木　中村市○○）
（井關○　辻興○×）

午後之部

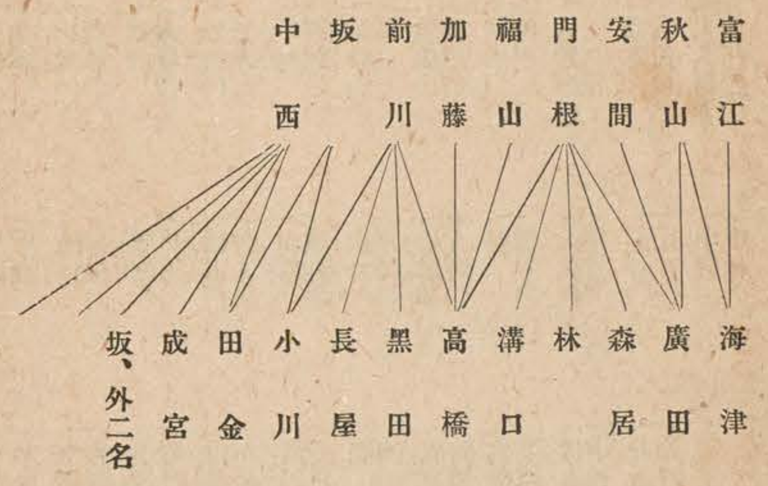
一時再開、審判諸先生の模範試合あり。流石に鮮かなる御手の内と拜見したり。終りて對外試合あり。因に彥揚は彥根揚武館、彥警は彥根警察署、岐中は岐阜中學校、長農は長濱農學校、長支は長濱支部。

劍道三本勝負

（本校　秋山○○　彥揚　富江）
（本校　廣田○○　彥揚　海津○）
（本校　加藤　岐中　安間○○）
（本校　門根○○　八商　福山○×）
（長支　溝口○○　本校　秋山○）
（本校　加藤○　八商　黒田○×）
（本校　成宮　岐中　中西○○）

（本校　森居○　長農　高橋○○）
（本校　門根○　彥警　林○×）
（本校　成宮○　彥警　小川○○）
（本校　坂○　長農　前川○×）
（本校　坂　岐阜　野村○○）
（本校　森居○　彥警　田金○×）

次に一本拔を行ふ。



第一等賞中西、第二等賞門根、第三等賞前川

柔道三本勝負

（本校 辻茂三 長農 加藤○）	（八幡 河村○○ 本校 今村）
（彥揚 大橋 本校 西村○）	（岐中 村山○○ 本校 西村）
（岐中 可知○ 本校 瀧谷○×）	（彥揚 横田 本校 上野○○）
（長支 星野○ 彥揚 大村○×）	（八商 筒井 本校 田中○）

次に一本拔を行ふ。結果左の如し。

第一等賞(三本)村山、田中。第二等賞(三本)西村。第三等賞(二本)星野

黒皮緘の長濱農學や緋の面紐つけたる岐阜中學、さては金色眩しき校章光らせる八幡商業などいづれ劣らぬ武者振り乍ら、孤軍よく大敵に當りし本校選手の勞又多とすべし。殊に勇壯なりしは劍道一本試合にして誠に龍攘虎搏の慨ありき。岐中の主將中西の奮闘は最も目覺しきものなりし。柔道の一本拔又岐中軍優勢を示しぬ。本校田中又努めたりと曰ふべし。

閉會せしは四時三十分。雨猶降り續きて點滴の音

愈々滋し。

秋季水上大會の記

大正六年九月二十三日我彥中水上部は例年の如く大洞内湖にて秋季水上大會を催しぬ。朝來碧空點翳なし。名譽に輝ける幾旒の優勝旗は颯々たる朝風に翻飜としてなびけるも勇し。見よ！突兀たる對岸の金城は、千年の眼を開いて彥陽男子の奮闘振を注視せんとするもの、あゝ。今日勝たずんば炎天三伏の猛練習そも何するものぞ、意氣既に冲天の概あり。八時半といふに號砲一發、大會の幕は切つて落されぬ。

第一回　普通レース

第一着　中村組(白)　六、二〇　一コース
第二着　押谷組(青)　六、三〇　三コース
第三着　西川組　二コース

(評)　白始めより優勢、赤は出發後暫時にして元氣衰へたり、されど青は廻航によりて取返し白と青との競爭となる、されど遂に一艇身の差にて勝つ。

第二回　レース

第一着　東野組(白)　六、三九　三コース
第二着　井關組(青)　六、四二　二コース
第三着　上田組(赤)　一コース

(評)　廻航は三艇五分々々、一艇身半にて白勝つ。

第三回

第一着　河村組(赤)　六、〇八　一コース
第二着　佳井組(青)　六、一二　二コース
第三着　松浦組(白)　六、一七　三コース

(評)　廻航は赤最も巧なり、二艇身の差にて赤勝つ。

第四回

第一着　田畑組(白)　六、一一　三コース
第二着　安井組(青)　六、一六　一コース
第三着　菅沼組(赤)　二コース

(評)　赤出發點にては故障ありて數艇身遲れ

て出發し白、青の競爭となる、白、青共に力伯仲して、手に汗を握しめしも一艇身の差にて白の勝となる。

第　五　回

第一着　岩田組(赤)　六、一八　　一コース
第二着　木村組(青)　六、四二$\frac{4}{5}$　二コース
第三着　谷口組(白)　　三コース
(評)　廻航は最も巧なり、赤最終まで優勢四艇身の差にて勝つ

第六回　獨　漕

第一選手　川村、田中、小西、中村、若林、林、田中(　)
第二選手　田畑、大谷、山田、門根、大久保、橋本、遠藤
(評)　流石選手の御手前天晴天晴、タイムを示さんに、第一選手　六、〇三$\frac{2}{5}$、第二選手　六、〇四$\frac{2}{5}$なり尚一層の努力あらんことを望む。

第七回　職員レース　(直航)

第一着　熊瀬川先生組(白)　三、三七　三コース
第二着　金澤先生組(赤)　三、五〇　一コース
(評)　山と云はず岸と云はず松の枝と云はず應援の聲喧し、樂隊がドガぐ奏する。この間を遙かに競ふ兩艇の舷側は時々オールが白い波の花を散らしてスプラッシユスプラッシユ、三艇身にて白勝つ。

第　八　回

第一着　上松組(赤)　六、三五　二コース
第二着　若林組(青)　六、三八　三コース
第三着　田中組(白)　　一コース
(評)　白は中途にてズボリ、赤、青の競爭となり、決勝點近くに至りて殆んど優劣なかりしが、一艇の差にて赤勝つ。

第　九　回

第一着　辻組(青)　六、三二　三コース
第二着　山田組(赤)　七、二〇　一コース
第三着　坂組(白)
(評)　廻航五分々々、赤、青、衝突せしも引分れて入る。

第十回　校友會各部レース

第一着　庭球部(藤井組)　六、二七　二コース
第二着　雜誌部(中村組)　　三コース
(評)　雜誌部オール不揃、庭球部の整然たるに比すれば數等劣れる感あり、力漕したりけむ廻航殆んど同時。庭球部は刻々雜誌部を壓倒して、約五艇身の差にて敗る。

第　十　一　回

第一着　中村組(白)　六、二九$\frac{2}{5}$　一コース
第二着　宮本組(赤)　六、三〇　二コース
第三着　成宮組(青)　　三コース
(評)　白始め優勢なりしも廻航後三艇殆んど平行し決勝點に迫る。

第十二回　倶樂部

第一着　鐵道　北川組(赤)六、〇九$\frac{1}{2}$　二コース
第二着　金龜　梶組(青)　　一コース

此時八商選手入場

第　十　三　回

第一着　瀧谷組(青)　六、四二　一コーズ
第二着　上松組(赤)　六、五〇$\frac{1}{5}$　二コース
第三着　市毛組(白)　　三コース

第　十　四　回

第一着　田中組(白)(角)　六、〇二　二コース
第二着　坂　組(赤)(武)　六、〇六$\frac{1}{5}$　三コース
第三着　藤井組(青)(野)　　一コース
(評)　お角力さん天晴れ天晴れ。

第十五回　倶樂部

第一着　中居組(白)(通)　六、〇三$\frac{2}{5}$　一コース
第二着　河村組(赤)(寄)　六、〇六$\frac{1}{5}$　二コース
(評)　半艇身の差にてあはれや赤一敗地に塗る。

第十六回　對校レース

第一着　八幡商業(白)　五、三五　二コース
第二着　愛知一中(赤)　五、三五$\frac{1}{5}$　一コース
(評)　對校レースなれば人氣湧くが如し、手に汗を握らしめぬ、應援の聲或ひは白と呼び赤と號ぶ、湖神眠も覺むべし。廻航の時愛知一中手間遠き廻り方をやりし爲め數艇身の差を生せしも後、

愛知力漕又力漕、決勝點に入らんとせる時雨艇殆んど同時。されど惜むべし東海の猛者もたゞ五分の一の差にて敗となる。愛知一中にして廻航の練習なかりしは、將を噛むのうらみあらずとせんや。

第十七回　來賓及生徒混合レース

第一着　辻　組(青)　六、一四 1/5　一コース
第二着　望月組(赤)　六、四〇 1/2　三コース
第三着　中居組(白)　二コース
（評）青の航手は徃年我校にて鳴りしもの始めより優勢約五艇身の差にて大勝。

第十八回　特選レース

第一着　松浦組(白)　六、一七　一コース
第二着　安居組(赤)　六、二〇　三コース
第三着　押谷組(青)　二コース

第十九回　名譽レース

第一着　田畑組(白)　六、一二　二コース
第二着　岩田組(赤)　六、三九　一コース
（評）約六艇身にて白大勝す。名譽の月桂冠は白のうくるところとなれり。

第二十回　年級レース

第一着　三年級(白)　六、〇九　二コース
第二着　五年級(青)　六、一〇　三コース
第三着　四年級(赤)　六、二七　一コース
（評）出發に際し各年級の選手を應援する聲盛なり。「たのむぞ」「しつかりたのむぞ」「ウン見てゝくれ」『やれしつかり」此の時雨沛然として至る、三艇ものともせず篠つく雨を肩にうけて戰う、嗚呼殺氣漲る。勝は三年級の得るところとなる、それ三年級壯なるや。

午後四時三十分、一時の秋雨何時やらん全く晴れ上りて晴空限りなく涼し。折からの滿山の紅葉、雨後の光にかがやきて金色の如し、喇叭の聲に一同整列、校長の辭あり。勇んで解散、時に午後五時。あゝ盛なりしかな今日の水上大會よ。

雜報

滋賀縣立彦根中學校校友會規則

第一條　本會は滋賀縣立彦根中學校の校風を發揚し、文武の藝術を練り、かねて本校に關係あるものの親睦を圖るを以て目的とす
第二條　本會は滋賀縣立彦根中學校々友會と稱す
第三條　本會は會員を分ちて特別普通の二とす
一、特別會員は本校職員及び嘗て本校に在職せしもの並に本校卒業生よりなる
第四條　第一條の目的を達せんがため本會は左の諸部を置く
一、學藝部　二、雜誌部　三、水上運動部
四、野球部　五、庭球部　六、武術部
七、角力部
第五條　本會々員は會費として左の規定に從ひ出金すべし
一、本校職員は會員として月俸百分の一を寄附するものとす
一、本校生徒は入會の際金壹圓を納むべし
每月の會費は金参拾錢とす
既納の入會金及會費は如何なる事情あるも返戻せず
第六條　本會は左の役員を置く
會　長　一名　本校長を推す
會長は本會の事務を總理す
副會長　一名
本校職員の内より會長之を委囑す
部長は會長の命を受けて各部の事務を監視す
編輯員　若干名
本校職員中より會長之を委囑す
編輯員は雜誌編輯を監督す
理　事
各部通常會員より選出せしめ會長若干名之れを命ず
理事は各部の事務を掌理す
會計　一名

職員中より會長之を委囑す
會計は本會の會計を掌る

第七條 役員の任期は一ヶ年とす
但中途任命のものも該學年末に於て其任期盡くるものとす

第八條 本會は左の大會を開く
水上運動會　五月一日(本校紀念日)
演武大會　六月
學藝大會
陸上運動會　十月三十日(天長節)
但各部に於て適宜小會を開くを得

第九條 本會は會長之を整理し、副會長之を參照す

第十條 本會は賞牌又は賞品を授與することあるべし

第十一條 雜誌の發行は一學年二回とし、無代價を以て會員に配布す
但現在職員を除く外特別會員には希望により實費を以て配布す

第十二條 會費の支出規則の改正及本會に關する臨時の處分法につき必要と認むる時は會長役員會を開く事あるべし

教職員動靜

○村田、青木兩先生を送る。

多年博物學の蘊奥を傾け給ひ、特に實理實驗の要を力說して生等に望まれし村田先生は東愛知縣に、或は英語に、或は國漢文に、或は体操に、到る處凡ならざる絕倫の才を抱き、熱誠以て生等を薰陶下されし青木先生は更に東神奈川縣に、いづれも湖山の秀色闌なる頃突如彥根の地を去られぬ。一身上の御都合と聞きては又何をか言はん。離合集散は士の常と聞く者を。唯願はくば兩先生、膽峯を負ひ琵漣に望む古城下六百の子弟を永へに忘れ給はざらんことを。

○野村先生を送る。

先生新進氣銳の才を抱いて敎壇に立ち給ふやこゝに一年、鬱勃の氣遂に止み難く、今鞭を棄てゝ西陲福岡の最高學府に入りて醫學研究に從はんとす、內外多事、それ自重せられよ。

○岩永、谷口兩先生を迎ふ。

達崎、野村兩先生の後任として今二先生を得たり。岩永先生は帝大出の俊秀、谷口先生は早稻田出の逸才と承る。生等不才、兩先生が啓發指導に俟つところ極めて多し。

○牧、川島兩先生を迎ふ。

村田先生の後任として牧先生、青木先生の後任として川島先生を得たり。吾等又幸なるかな。敢て駑鈍をつくして兩先生の敎を俟つ。

○大坪先生を迎ふ。

吾校武術部殊に柔道部に振はざること久し。今回同先生を長濱より迎ふることゝはなりぬ。先生風丰魁偉、堂々の巨軀はかの山の如く林の如しといふ古豪傑に似たり。本校柔道部の前途又期して待つことを得んか。

兎狩の記

「明十六日野外運動擧行に就き云々」の揭示の出たのは第一回小試驗の了つて幾日もない二月の十五日。野外運動といふても兎狩だといふことは無論誰も彼も充分飮込んで居るのだから可笑しい。例の東海道線不通といふ、ドヱライ事を引起した大雪の名殘は、北向の屋根や、日陰の軒下に堆の一杯たまつた、黑ずんだ、醜い殘骸を橫へて居るまるで石の樣に固い。これでも警察の喧しい布令で大部分は小溝や濠に放り込まれた後なのだ。郊外に出たらざんな具合か知らん。こう見渡して見ると古城山の松の木の間に白いものが澤山見える十六日。昨夜は宵の中からカラ〱に大地は凍つて居たが、起きて見ると空ッ風がヒユー〱うなりを立てゝ居る。水の少い手洗鉢は底まで凍つて居る。顏を洗つて流した水も見る〱凍つて了つた。

八時三十分。背負袋を肩にして運動場に集合する測候所の豫報が當つてチラ／＼と粉雪が舞始めたあの小口組の赤い烟突のあたりから舞踏しながら吹かれて來る。眼も口も開けられない。こゝで甲乙二隊に分れて甲隊から出發する。甲隊指揮官は内山先生。乙隊は立花先生。網を擔ひ鎌を腰にした先發隊は、池田先生引率の下に早朝出發した相だ。

大洞へ行く長い田圃道へ出る。冬枯の何の遮るものもない黑い田と、白う光る内湖とを渡つて西の方から耳も千切れる樣に風が吹く。息もつけない而も蜒蜿南に走る鈴鹿山脈の上のあたり、太陽は昇つてポカ／＼と暖い光を右半身に投げて呉れる居眠りしたい樣な暖かさだ。まるで矛盾して居る風の神とお日樣が喧嘩した話を思出す。

大洞山の麓でこゝまで一緒に來た二隊は分れ、甲隊は山の北面、乙隊は山の南面、即甲は背面を乙は前面をといふ割で此處から山傳いに古城山、切通しを越え、千代宮、天寧寺山の方へ狩立てゝ行かうとするのだ。甲の持場には白旗が飜つて居る乙の方には松の木の茂みから赤旗がのぞいて居る二隊は分れて持場へ向つた。之から競爭になるのだ。

甲隊に泯つて鐵道線路の堤防を下りて山の麓を圍んだ。「前進」の命がある。間隔をとつて竹籔の中を靜に前進する。一面の雪だ。孟宗竹が散々に折れて居る。バサ／＼と凍つた雪を踏んで行くと、俄に陷落して靴をとられる。砂の樣な凍つて痛い奴が靴の中に這入る。溶け出すとまるで感覺がなくなる。――途端、ピイッと笛が鳴る。ワアッと鬨の聲が雪の斜面に反響する。愈々始つた。雪を蹴立てゝ灌木林に飛込む。喚聲を盛に擧げる。灌木林を出た。丸で雪の原だ。其雪の原に穴が開いて上草や小松が覗いて居る。長い冬のしいたげに根氣強く反抗して頭をもたげ樣として居るのだ。蟻の樣な幾十百の黑影が大雪溪(?)を泳ぐ樣に攀ぢて行く。實際泳ぐより外に手懸りもない。冴つ赤旗のあたりで棒切を持つた人が澤山走つて居る出たらしい。喚聲が急に大きくなつた。――漸く大雪溪を上り切つた。やれ／＼一戰役は終つたぜ

油汗がにじむ。

今の戰で一匹かゝつた。それが可笑しい事に白組が追ふて丁度附近に張つて居る赤組の網にかゝつた。兎君どう戸まどひしたのか。餘程面食つたものと見える。見下せば丁度今の反對の谷では乙隊が盛にやつて居るところだ。山の上の風は相變らず烈しい。時々ワアッ／＼といふ聲が千切れた樣にとんで來る。黑い影がヒョコ／＼現れる。段々網に近寄つて來る樣子だ。見て居る中に一匹飛出した。網の間近でサッと左に逸れた。待ちかまへた人々にワアッと追返された。驚いて退却して來たが思ひ切つて網に飛込んだ。あつちの岩角、こつちの木蔭から五六人の網番が躍り出る。――氣笛が聞えて隧道から汽車が現れた。

甲隊は今度は井伊神社裏に集合して清涼寺山(?)を狩つた。上り切つた處は古城山だ。谷は割合に雪が少かつた。湖西の山々から多景島の邊りまで空も水も陰慘な灰色に包まれて、麓から逆に吹上る風にやゝともすれば殺倒されそう。又しても雪さへ交つてきた。

古城山を迂回して、先刻の清涼寺山の裏邊りを狩立てる。今度は中々の大行軍だ。右肩とすれ／＼に雪の絶壁はそゝり立つて居る。材木がゴロ／＼して居る。左は足下から切立つた斷崖だ。遙か下の方に灌木林が現れて居る、――一歩誤れば千仭の谷――まるでアルプス越だ。雪をすべつて雜木林に這入る。もう雪は少しも見えぬ。赤茶けた土には落葉が散りしいて、柔いベッドを造つて居る。殊に東の斜面だ、北風は少しも當らない。兎公が日向ぼつこするに持て來いの處だ。雜木林を下りて又叢に入る。雪溶けの谿水はチョロ／＼足下を流れて居る。デュク／＼した蘇苔を踏んで持場に就く。こゝは全く谷の底だ。策戰に手間が入つたと見えて笛が中々鳴らぬ。久しく經つてからピイッと聞えた。ワアッと應じる。ワアッ／＼と上つて行く。

上り盡した時晝食の喇叭が峯々谷々に鳴り響いた。一同それ／＼の場所を占領して辨當を開く。鳥居本の村が丁度目の下に連つて居る。合羽が一杯畑にほしてある。村の東端から丘陵は東に走り、更

に奥には雪仙、鍋尻などの後嶺が控えて居る。これは一そう雪が多い。而して東北天を劃して、白銀の雄姿を現はして居るのは膽吹山だ。

一時頃再ひ進合、焚火の跡を雪でもみ消して出發。今度は峯傳いに切通しに出で千代宮方面を行ることになつた。既に午前中甲乙二隊合せて五頭の獲物があつた。喇叭手二人が擔いで行く。この分では……と思はれぬでもなかつた。

併し駄目だつた。南の斜面に風を避けて休憩する雲が刻々に動いて居る。軈て暗雲がパツと裂けて青い空が現れた。魂のぬけ殼の樣な白い弦月がスーく〳〵と西に走つて居た。太陽はポカ〳〵照つて居る。焚火の烟が靜に流れる。其紫の烟の行手に當る遙か向ふの峯で乙隊が活動して居るのが手にとる樣だ。

愈々最後の激戰に移るべく山を下りてとある桑畠に集合した。兩隊聯合で新しい試を以て最後の突擊にうつるのだ。新しい試みとは? 網なしで——網の代りに人の垣で兎を追つめ樣といふのである理想としては此方法が一番面白く、又所謂、共同一致の精神を發揮するに以て來いだ。併し餘程愼重にやらねばならぬ。上級生と下級生と入り交つて豫定の谷へしづ〳〵と進んだ。丁度千代宮山の裏に當るところで、擂鉢の底の樣になつて居る。包圍は出來た。聯絡はとれた。號令はかゝつた。喚聲は上つた。ひた押しに押して行つた。——そして何にも出なかつた。實は包圍の終るか終らぬ間に逃げて了つたとも云ふが。遠巻きに巻いた圓陣が段々せばまつて蟻の這ひ出る隙もない樣にぐるりと近寄つて來て、そしてポカンとして居ると圓陣の眞中には二三人の老婆が知らん顏して落葉を搔いて居る。皮肉と滑稽と悲哀と——變な氣がした。兎に角失敗に了つた。呆氣ない失敗に終つた。然し果して此方法は失敗だらうか。否々決してそうは思はれない。時と所と人の和とこう三拍子揃へば申分はないが、人の和は勿論として地の利を得れば此方法は隨分有望だと思はれる。一番興味のあるのもこれ。地の利といへば兎の居りさうな處で、うまく包圍の出來さうな處だ。棲り相なところは隨分あるが、うまく相互の連絡がとれて兎の逃出す隙を與へない樣な處を見付け出すのは中々難しい注文だらうと思はれる。これは單に記者の素人考へ。然し何といつても各人の共同一致といふ精神が第一。暫く記して來らん年の結果に俟つ。

今やつた谷のすぐ下の畑地に整列。校長の「今朝の天候では如何かと實は心配して居たが、幸ひこんなに好い天候になつて結構である。皆の者も御苦勞であつた。こんなに澤山獲れるのなら來年からは何かもう一層實のある企をして見たいと思つて居る。云々」の訓辭があつて。一同解散。時に四時。如何にも一天靑く澄み渡つて太陽は樂し相に下界を見下して居た。（了）

寄贈雜誌

明倫　三一　名古屋市立明倫中學校々友會
校友會雜誌三四　廣島高等師範校友會
學友會雜誌三一　奈良縣立郡山中學校校友會
矯々會雜誌一〇　福岡縣立明善中學校々友會矯々會
北辰會雜誌八〇　金澤第四高等學校北辰會
近江商人　七七　滋賀縣八幡商業學校近江尙商會
校友會雜誌一七　岩手縣立師範學校々友會
校友會雜誌　六　滋賀縣水口農林學校
校友會誌　三〇　熊本工業學校校友會
校友會雜誌　四　滋賀縣膳所中學校校友會
學友會報　一三　一五　神戸高等商業學校學友會
知道月報　九六　九七　一〇〇　一〇一　水戸市水戸中學知道會

日誌摘要

大正六年八月
二十五日　第一時間の始めに於て職員生徒一同講堂に集合。小早川前校長の告別式を行ひ、次いで春日校長の新任對面式引續き第二學期始業式を行ひ平常の如く授業をなす
二十六日　參謀本部員一行來校
二十八日　滋賀縣屬村上、佐野兩氏來校、天覽品設備上に付き調査せらる

二十九日　午後零時三十五分達崎教諭を彦根驛に見送る
三十一日　天長節に付き休業

九月

五日　周防衞生主事來校
十五日　學校長、山岡教諭、物理學實驗室設備打合會議參列の爲め滋賀縣廳へ出張
十九日　午後一時より公會堂に於て菅野力夫氏の世界探險談を聞く
二十一日　滋賀縣技手小林氏來校本校舍撮影せらる
二十二日　午後一時より招魂社參拜
二十三日　大洞内湖にて水上運動大會を開催す
二十四日　秋季皇靈祭に付休校
二十八日　學校長午前九時三十五分彦根發列車にて多賀神社に參拜
梅田教諭以下職員、生徒一同午前九時より縣社佐和山神社へ參拜、午前十時二十分歸校、午前十一時より授業

十月

一日　午前零時四十分集合、井伊直弼朝臣誕生祭に付き銅像前に參拜せり
三日　本日より警官夜警せらる
五日　午前十時より野村教諭退職の挨拶あり
八日　午前八時より講堂に於て行啓記念式を擧行す、式後角力大會あり
十七日　休校、午前十時本縣教育課屬橋爪平兵衞氏來校理化實驗室新設に關し實地取調の爲め來校に付き山岡教諭出校を促し夫々調査を了す
十八日　第一時限の始め岩永先生の對面式を行ふ
十九日　午前五時四十五分頃强震あり
二十一日　佐々木衞生課長水質檢査の爲め來校
二十二日　放課後大演習に關する打合せ會議を開き午後五時閉會
二十三日　放課後奉迎送提灯行列の豫行演習を行ひ終つて右に關する批評並に打合せ會議を開き午後五時十分閉會
二十四日　片山侍醫頭、中村宮内省技師一行、永田警保局長、大森警察部長一行來校
二十九日　第一時限講堂に於て特別大演習に就ての訓示あり續ひて奉迎送の豫測演習及提灯行列の演習をなす
三十日　本日學校明渡準備の爲め休業
三十一日　午前第八時半集合、講堂に於て天長節祝日に付き拜賀式を擧行す、式後午後一時彦根小學校に御眞影を奉遷し引續き同校に移轉す

十一月

一日　本日より西小學校に於て第五學年甲乙丙組の授業を行ふ、四年以下休業
六日　天皇皇后兩陛下京都へ行幸に付十二時十二分當驛御通輦被爲遊に付き銅像前に集合奉迎送をなす
十日　本日にて授業を休む
十三日　午後一時西小學校運動場に集合し彦根區裁判所前に於て奉迎をなす、午後六時西小學校運動場に集合各學校聯合提灯行列を行ふ
十四日　本日兩度奉迎送をなす、夜提灯行列をなす
十六日　大演習參觀
十七日　閱兵式拜觀
十八日　本日未明
大元帥陛下御還幸を奉送す
午後
皇后陛下の御還啓を奉送す
二十二日　御眞影を中學校に奉遷し同時に復舊す
二十五日　御座所拜觀を止む
二十六日　本日職員生徒一同集合各室の整理を行ふ、谷口教諭の新任式を行ふ
二十七日　講堂に於て大演習に就ての訓示あり終て各室の掃除を行ふ
二十八日　試驗又は授業を行ふ、牧牛尾氏着任
二十九日　第一時限の始めに於て牧牛尾氏の新任式を行ふ
三十日　川島丈内氏來校學校長に面談

十二月

七日　川島教員對面式を行ふ
九日　電氣取外しの職工來る
十九日　本日より第二學期試驗を行ふ
二十二日　本日午後零時過新任本縣知事赴任の爲め當驛御通過に付き學校長以下職員一同出迎を

なす

二十五　午前十一時より講堂に於て終業式を行ふ

二十九日　本日手帳交付

大正七年一月

一日　午前第九時講堂に於て新年拜賀式を擧行す

八日　午前第八時十分集合、講堂に於て新年始業式を擧行す、午前九時十分式終る、九時二十分より授業を行ふ。

十五日　學校長は木川書記を隨へ長濱農學校、長濱警察署へ出張

十八日　學校長滋賀縣廳へ出張

二十一日　大坪克和氏本校柔道敎師囑託につき第一時限の始に新任式對面式を行ふ

二十六日　氷口農林學校長河田惠治氏來校、內山敎諭膳所中學校へ出張

二十九日　學校長は畑敎諭を隨へ滋賀縣師範學校に於て開會中の數學敎授研究會列席のため出張

二　月

三日　日曜日、本日武術大會開催

八日　百尾秀利氏來校、卒業すべき生徒の記念撮影をなす

九日　午後二時より武術道場に於て東操氏の肉彈に就ての講談あり

十一日　午前八時三十分より講堂に於て紀元節拜賀式を擧行、午前九時より武術道場に於て彥根警察署主催の劍道試合あり

十二日　彥根警察署長福田寅吉氏、栃木縣佐野警察署長大垣儀十郎氏來校

十三日　學校長、縣立學校長會議參列のため滋賀縣廳へ出張

十六日　午前八時半集合の上大洞山より天寧寺山迄の間に於て兎狩をなし五頭を獲たり

二十五日　岡部常一氏來校學校長に面談

二十六日　學校長京都市へ出張

三月一日　學校長事務伺のため滋賀縣廳へ出張

行啓記念文庫のことども

○大正三年十一月　梅田三郎氏「相撲評話」外一點を寄贈せらる

○大正四年二月　東京興文社より「ダイアモンド字典」を

○大正五年一月　長濱下郷健三氏より「財政と金融」外八點を

○大正五年一月　東京榊原文盛堂より「最新英文和譯」外一點を

○大正五年六月　小早川潔氏より「大楠公奮忠事歷」外三點を

○大正五年七月　井伊伯爵家より「歐洲各國民の心性」外三十九點を

○大正五年十一月　本校より「中學文庫」外六點を

○大正五年十二月　卒業生、上阪香苗氏より「江田島生活」を

○大正六年二月　本校より服部、小柳著「漢和大字典」を

○大正六年三月　丹下德治郎氏より「日本百科大辭典」「大日本國語辭典」「漢籍國字解全書」「佛敎大辭典」等、合計約七十點を

○大正六年六月　高橋安吉氏より「日本近世吏」を

○大正六年五月より、文庫擴張寄附金卽明治二十二年以降本校卒業生二百十八名の寄附金約七百圓を以て購入を開始し、大正六年度末迄には二百八十八點に達せり。今その主要なる書目を擧ぐれば、

スタンダト字書、大日本地名字書、通俗世界全史、百家說林、南彊繹史、容齋隨筆、康熙字典、大日本人名字書、字貫、玉篇等也。

○大正七年二月　文泉堂より「近江人物志」を

○右いづれも寄贈せらる

○本文庫の創立は大正三年の八月にして、寄贈、購入書物は約六百種八百卷となれる也。執筆者森下菅根

○附記　大正七年三月、不破榮次郞氏金壹千圓を本文庫に寄附せらる

大正六年度校友會 收入決算書

科目	豫算高	決算高	過不足
端艇改造費繰越	九〇〇・〇〇〇	九〇〇・〇〇〇	〇
新入會金	一二九・〇〇〇	一二九・〇〇〇	〇
預金利子	二九・七七〇	三六・〇一〇	六・二四〇
職員醵金	一三七・五七〇	一四二・五四〇	四・九七〇
生徒醵金	一,七八二・〇〇〇	一,八六六・六〇〇	八四・六〇〇
前年度繰越	三二二・八八八	三二二・八八八	〇
雜誌賣却代	〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇
生徒特別醵金寄附餘剩	〇	三・四九〇	三・四九〇
計	三,三〇一・二三八	三,四〇二・五三八	一〇一・三〇〇

大正六年度校友會 支出決算書

科目	豫算高	決算高	過不足
短艇改造費繰越	九〇〇・〇〇〇	九〇〇・〇〇〇	〇
同本年度積立	一五〇・〇〇〇	一五〇・〇〇〇	〇
記念文庫	一五〇・〇〇〇	一四九・四三〇	・五七〇
學藝部	三五・〇〇〇	二一・五一五	一三・四八五
雜誌部	二三〇・〇〇〇	一二七・二五五	一〇二・七四五
武術部	一一五・〇〇〇	一一五・〇〇〇	〇
水上部	三三〇・〇〇〇	三二九・九七五	・〇二五
野球部	二九〇・〇〇〇	二八九・七四八	・二五二
庭球部	一七五・〇〇〇	一七四・九九五	・〇〇五
角力部	八五・〇〇〇	八三・六二五	一・三七五
水上大會	七五・〇〇〇	八九・〇五五	一四・〇五五
陸上大會	八五・〇〇〇	八五・〇〇〇	〇
木綿幕新調	二〇・〇〇〇	〇	二〇・〇〇〇
天幕新調	五五・〇〇〇	〇	五五・〇〇〇
雜費	二五〇・〇〇〇	二五三・九〇五	三・九〇五
豫備費	二三六・二二八	二四二・五〇〇	六・二七二
三十年記念式費	一一〇・〇〇〇	一一〇・〇〇〇	〇
計	三,三〇一・二三八	三,一三二・〇〇三	一六九・二三五

大正七年度校友會 收入豫算書

科目	金額	備考
端艇改造費繰越	一,〇五〇・〇〇〇	
新入會金	一三一・〇〇〇	現在額
預金利子	三六・〇一〇	前年度實入額
職員醵金	一四二・五四〇	同
生徒醵金	一,八一五・〇〇〇	五百五十八人平均
前年度繰越	二七〇・五二五	
計	三,四四五・〇七五	

大正七年度校友會 支出豫算書

科目	金額	備考
端艇改造費繰越	一,〇五〇・〇〇〇	
同本年度積立	一五〇・〇〇〇	
記念文庫	一五〇・〇〇〇	
學藝部	三五・〇〇〇	
雜誌部	三三〇・〇〇〇	雜誌三回印刷費
武術部	一一五・〇〇〇	
水上部	三三〇・〇〇〇	
野球部	二九〇・〇〇〇	
庭球部	一七五・〇〇〇	
角力部	八五・〇〇〇	
水上大會	八〇・〇〇〇	
陸上大會	一〇〇・〇〇〇	
雜費	二七〇・〇〇〇	
運動地均補助費	三三・七四〇	
遠足登山及兎狩雜費	五〇・〇〇〇	
豫備費	二〇一・三三五	
計	三,四四五・〇七五	

編輯餘滴

▲林樾山端の月、光色なほ寒うして、香霧迷はず、茅屋牆裏、一幹の梅、蕾を守って、開綻未だし。あはれ三春の行樂、そもや何方。疑ふらく、冬眠甘睡未だ半なるかと。否、否、長夜の夢既に既に逝きぬ。さるは兎まれ角もあれ、何處を春の影とだに、おぼろに知らむ由もなし。

▲日影あたらぬ編輯室の一隅に、筆執る同人、敝衣餘寒に慄々として戰くぞかし。冀くば一片慈寵の情を垂れよや。

▲顧れば去る大演習終了後種々の理由の下に編輯

室を逐ひ出されし我等同人、今初めて我に歸りし心地ぞする。思へば何れをそれとも定めで、一所不住てふ、坊主さながらの生活をなしつ、或は廣からぬ校舎の果を隅より隅へと、かの游牧の民の水草を逐ひて不斷の移住をなすが如く茫々轉々として徒らに流離の憂身を窶せし程の事もありき。

寶にや、騷忙多端の時、吾人の手になる、はたして我、人共に意を滿すべきものあるや否や。玉肌、敝衣組袍の穢す處とならざりしか。之れ吾人の憂懼最も厚しとなすもの、美質損せられずんば幸なり。

▲本號發行に關し少しく吾人が抱負とせし處を語らしめよ。

「吾人は本號を以て、大演習紀念號と目せむことを希ひき。而して大演習に就きての諸君の稿を集めなば、優に一卷の册子として發行なし得べしとて、ひたすら諸君の山なす投稿を豫期して待ちぬ。」然るを、豈に料らんや、事は豫測に反して、大演習に關する投稿一葉すらなく全く皆無なりしと云ふを妨げず。吾人の失望何ぞ須ひん、然れ共、その故たる蓋思ふべきものなしとせむや。

吾人爭でか、無盡永劫の一大名譽を看過し得べき。同人相謀り、記を分ちて三記となし記載することとはなしぬ。

されば吾人は、發行切迫の機に至りて、俄かに筆硯雜騷繁忙の極に達しぬ、爾れば長夜また短く、閑日また安々のものたらず、徒らに心焦胸底の三苦、續々繼いで吾人を壓するや急なり。而して、神聖堂々當にかくあるべきの戰記筆錄の跡、冒瀆して揭げざるべからざるに至る。遺憾ならずやは。所詮避く可からざるか。急餘の一策、效又なし、慚愧に堪へず。

▲卒業生諸君、續々通信さる、玆に厚く感謝の意を表す、希くば爾後も御愛憐の程を乞ふ。

▲五年級諸君の御投稿少なかりしは如何。

▲本號頁數、僅かに五六十を數ふるのみ、今となりて怨恨嗟嘆すとも如何せむ採るに道なく企てんに術もなし、こは編輯同人の齊しく萬謝して

止まざる處、乞ふ、吾人が苦衷を察せられん事を。

▲彌生未だ名のみと云へど三晨一宵、春影漸く四顧の裡に滿つ。

嗚呼、春や、健兒玉杯に花うけて、綠酒に月の影宿し或は青春の觀樂の巷にあくがれ、夢想の薫りにひたりて酔ふ、はた努々力々、大いなる躍進の響を上げて青雲成就の峯の月に一歩一歩華やかなる跡をきざみ行くべき時に非ざるか。蓋し清心の愈良雄が、劍と筆とを併せ持ち、人生行路の一端に戰ふの時にあらざるか。されば我れ人共に、共に、大いなる、輝ける我等が行手をば謳歌せる哉。

大正七年三月十日　　陸軍紀念日編輯終るの日

同人

追記

種々なる事情のため刊行に約一ヶ月の遲延を來せし段誠に申譯も無之く候。事情とは市毛部長の御退職等にて聊か編輯事務に澁滯を來したるもの。次回よりは必ず諸兄の御期待に背くまじく覺悟致し居候。此の覺悟に免じて今度の事は先づ先づお許しの程を願上候。以上

五月初旬

附録

卒業生人名簿訂正篇

訂正中には文字の訂正住所氏名の訂正及變更等を含む記號中○は正なるもの、新に變更せるもの等を示し又？は不明不確實を示す

第一回（明治二十二年）

栃木縣立宇津宮高等女學校長　津川竹治郎
○栃木縣立宇都宮高等女學校長　同
第三高等學校卒業　元島鼎三郎
○岡山縣立笠岡商業學校敎諭　同
福岡縣中學傳習館長兼敎諭　文學士　加藤常次郎
○三池中學校長　文學士　同
○福岡縣立中學明善黌長　同

第二回（明治二十三年）

千葉縣山武郡二川村　藤田國太郎
千葉縣山武郡二川村小池開業醫　同
大津坂本理聖院英語敎師　太田幸次郎
◎大津坂本理聖院英語敎師　太田孝次郎
？滋賀縣愛知郡八木莊村　珠玖　龜藏

第三回（明治二十四年）

北海道小樽區色内町日本銀行員　古川銀次郞
○日本銀行箱館支店長　同
古川鑛業、東京麴町區八重洲町　奥村龜太郎
○古川製鑛株式會社技師　同
廣島縣佐伯郡大柿村　藤野珖三郎
○廣島縣佐伯郡大柿村大坂合同紡績株式會社能美支店　同
兵庫縣姫路市五軒邸百十番地
陸軍三等主計法學得業士　西村惣十郎
○大阪府枚方町　同
京都市下京區蛸藥師通　福水吉兵衛
○陸軍糧秣本廠主計　福永　延之
横濱市山下町三、宮部千太郎合名會社員
宮部千太郎
○横濱市山下町三、宮部末高合名會社員同
？彦根町字柳　野中德三郎
？京都府紀伊郡納處村　藤川東太郎

第四回（明治二十五年）

東京市四谷區坂町六四衞戍病院　前川宗太郎
○東京市四谷區坂町六四東京第一衞戍病院主計　同
野洲郡南櫻村　櫻井　來助
○野州郡三上村大字南櫻村　同
大阪府工業試驗場技師　岩崎　寅造
○大阪府工業試驗場技師　同
史料編纂官　文學士　中村　勝磨
○東京帝國大學史料編纂官　文學士　同
犬上郡豐郷村　醫　馬場　良呈
○死亡　同
靜岡縣駿東郡小山町富士紡績會社　相場市郎戸
○神奈川縣程ヶ谷富士紡績會社技師　同
彦根町字西馬場　高橋　行次
○神戸市鈴木商店敎育課主任　同
日本生命保險會社多賀代理店　北川　虎吉
○官幣大社　多賀講理事長　北川　彦市

第五回（明治二十六　）

新潟鐵工場　木川　行藏
○新潟鐵工場技師　木川　行藏
東京市小石川區水道町米國工學士　大久保藤吉
○東京小石川區水道町二五　同　同
？兵庫縣宍粟郡西谷村辯護士法學士　飛石久太郎
東京市京橋區南紺屋町ウィンクル商店　中山　好次
○横濱市山下町四六、太平洋貿易合資會社　同
東京府荏原郡入新井村新井宿
海軍造船中監　吉田仙之助
○東京府荏原郡入新井村新井宿
海軍造船大監　同
佐賀縣官幣大社大島神社宮司　大神　正道
○大阪府官幣大社大島神社宮司　同
高知縣伊野町土佐紙合資會社員　窪内　角馬
○高知市新京橋　同
京都市下京區堺町　河村秀次郎
○死亡？
？明治製糖株式會社員　藤山　銀三
？福岡縣福岡區因幡町　永田　稲吉

第六回(明治二十七)

大阪府立八尾中學校敎諭　佐竹　制心
○富山縣高岡中學校長　同
東京豐多摩郡和田堀内村井伊伯爵家方
高橋　敬吉
○井伊伯爵家傳育主任　同
東京控訴院判事　法學士　三宅　高時
○宮城控訴院判事　法學士　同
高知縣技師　工學得業士　前田　弘
○死亡　同
大阪市東區南本町　醫　松本百之祐
○大阪東區南本町一丁目　醫　同
煙草專賣局函館支局長　法學士　村岸松兵衛
○煙草專賣局水戸支局長　法學士　同
宮内省帝國林野管理局靜岡支廳　横山辰治郎
○東京市四谷區堺町二〇　同
彥根町安淸新屋敷　法學得業士　高橋徹二郎
○死亡

第七回(明治二十八年)

千葉醫學專門學校敎授　醫學士　弘世保三郎

○內國製藥株式會社技師　醫學士　弘世保三郎

第十回(明治三十一年)

彥根町外馬場　陸軍步兵少佐　金田　參良
○第八師團副官　同

第十一回(明治三十二年)

東京市麴町區麴町　中村　元應
○東京市麴町區一番町二七　同

以上

投稿規則

一、投稿は學術の範圍内に於てし、決して政治的時論に亘るべからず。
一、投稿は本會所定の用紙に楷書にて認め平假名を用ふべし。
一、投稿には各自句讀を施すべし。
　但圏點は一切施すを禁ず。
一、投稿は其篇を特にすることに其用紙を改め、題の下に住所若しくは年級及姓名を明記すべし。
　但變名及若しくは雅號を許さず。
一、投稿は其長短を問はず全篇完備せるものたるべし。
一、投稿は其掲否を問はずすべて之を返却せず。

明治廿七年五月三十日内務省認可
大正七年六月十日印刷
大正七年六月十五日發行
非賣品

發行所　滋賀縣立彦根中學校　校友會

代表者　滋賀縣立彦根中學校内　臼田紀六

印刷人　岐阜縣大垣市郭町一五三番戸　西濃印刷株式會社代表者　河田貞次郎

印刷所　岐阜縣大垣市郭町一五三番戸　西濃印刷株式會社